

バッハ:カンタータBWV4の歌詞についての一考察 (2)

前号では合唱曲のみを歌うことを前提として歌詞の考察を試みたが、全曲演奏することになったので改めてこの作品の基となっているルターの7節に亘る歌詞全体について考えてみたい。



上図は1524年ヨハン・ワルター編纂の讃美歌集に採用されたBWV4の原曲となるルターのコーラルの旋律と歌詞を示したものである。歌詞は第2節(第3曲)までだが、古いドイツ文字で印字されており語句の綴りや語尾変化の一部が異なっているだけでBWV4の楽譜と同じ、旋律はカンタータ全曲の基調になっているものでこの作品がコーラル変奏曲と言われる由縁である。

さて歌詞の第1節(第2曲)は前号で説明した通り「私達の罪の身代わりに死の縛めにあったイエスが復活し私達に命をもたらしたことに感謝を捧げる」という受難と復活とその感謝を歌うものだが、第2節(ソプラノとアルトの歌う第3曲)はイエスが出現する前の世界を描く。「誰一人死を従えられる者は居ない、それはすべて私達の罪のせい」と嘆き、死が専制支配することによる絶望感に満ちた曲想で、前号に載せたブリューゲルの「死の勝利」の世界を想起させる。ルターの作詞した1524年は宗教革命に伴う農民戦争の最中で、その後バッハが活躍するまでの200年間はペスト(黒死病)の大流行や30年戦争(1618-1648)などがあり誰にでも死はすぐ近くにあった。ちなみに日本では大河ドラマの主人公真田丸が活躍する戦国時代にあたる。

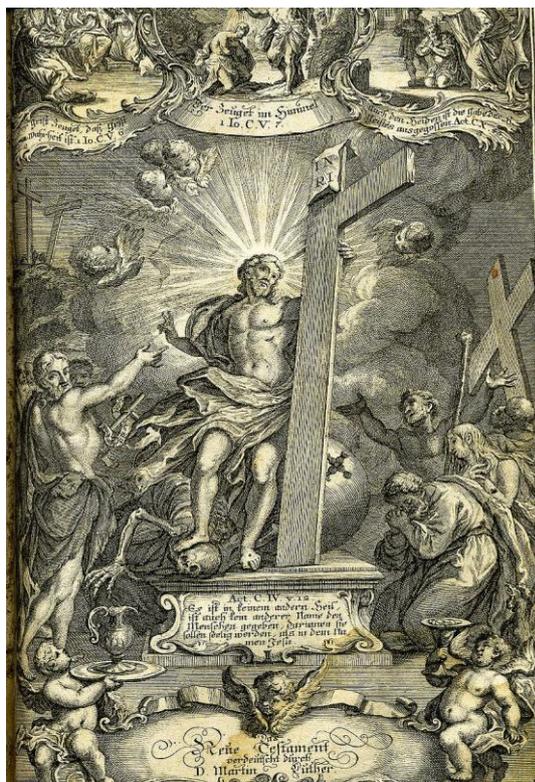
ドイツ語としては第2節第1行の末尾の *kunnt* は現在の辞書には全く載っていない古語である。上図の第2節の歌詞中にみられる *kund* なら中高ドイツ語(中世時代のドイツ中部・南部地方の方言)として使用されているみたいだが、現代のドイツ語はルター訳聖書を基礎としており、バッハ時代の新高ドイツ語が標準語となったものだが、ルターの前詞からの変更がバッハによってなされたかどうかは不明で、ベーレンライター楽譜に「新バッハ全集の Urtext(原典)による」と書いてある以上ミスプリは別としてその通りにせざるを得ないであろう。もともと *kund* も *kunnt* も発音は同じなので歌うにあたっては何ら問題ない。付言すれば第7節の *feiren* は *feiern*(祝う)の同意語と思われるがその由緒は詳らかではない。

第3節(第4曲テノールソロ)は第2節の「死が支配する世界」から一転し、イエスが私達の身代わりにやってきて罪を追いやり、死は形骸だけになりその棘(とげ)が抜かれる光景を描く。これに続く第4節(第5曲合唱)はそこに至る過程での生と死の奇妙な戦いが主題である。その出典は新

約聖書のコリントの信徒への手紙第15章の聖句「死は勝利にのみ込まれた。死よ、お前の勝利はどこにあるのか。死よ、お前のとげはどこにあるのか。」(新共同訳)にある。ブラームスのドイツ・レクイエムを歌ったことのある人ならその第7曲の合唱とバリトンソロとの激しい掛け合いを想起するのではないだろうか。第4節の最後の2行の解釈は難解だが、「イエスの十字架上の死が人間の死を浄化し、死はもはや恐怖の対象ではなく、むしろ蔑視すべき対象に成り下がった」ということか。

第5節(第6曲のバスソロ)はイエスが過越しの生贄の子羊として十字架に掛けられる意義を改めて謳っている。戸口に印された犠牲の子羊の血を死に突きつけることにより死神は撃退される。そして第6節(第7曲)は復活祭の喜びを歌う。この曲では Wonne(歓喜)と Sonne(太陽)のスラー付きの三連符、さらには Gnaden(恵み)と Herzen(心)の三連符によるソプラノとテノールの二重唱のミスマが見事だ。

最終節(第7節第8曲コラール)はコリントの信徒への手紙第5章の次の聖句「いつも新しい練り粉のままでいられるように、古いパン種をきれいに取り除きなさい。現に、あなたがたはパン種の入っていない者なのです。キリストが、わたしたちの過越の子羊として屠られたからです。だから、古いパン種や悪意と邪悪のパン種を用いないで、パン種の入っていない、純粹で真実のパンで過越祭を祝おうではありませんか。」(新共同訳)に基づく。(ここで「パン種」という言葉が出てくるが、これはパンの発酵に使われる酵母のこと。ユダヤ人は過越の祭りに際して、エジプトを逃れた先祖の苦難を偲んで種なしパンを食べる習慣があった。「過越祭」とはユダヤ人の出エジプトを記念する祭で、旧約の神がエジプト中の初子を殺したとき、仔羊の血を門口に塗ったユダヤ人の家だけは過ぎ越したという故事にちなむ。)古い信仰を排除し新しい信仰と命を得た喜びを歌う簡潔なコラールである。



左の図は1769年発行のルター聖書の表紙図でイエスの復活を描いたものである。作者は不詳だが十字架を掲げ死から甦がえった晴れやかなイエスの足元には骸骨姿の死神が頭を踏みつけられている。ブリューゲルの「死の勝利」とは真逆で「イエスの復活による生の勝利」を謳歌したこのカンタータの真髓を如実に顕現しているのではないだろうか。

全節の末尾にある Halleluja(ハレルヤ、ラテン語などでは語頭のhを発音せずにアレルヤ)はヘブライ語由来の言葉で「賛美する」の動詞の命令形 hallelu(ハレルー)に神の名 JHWH(ヤハウェ)を短縮した Jah(ヤー)を付したものである。第2曲でのバッハの Halleluja の音節の捉え方は Hallelu-ja ではなく、Halle-luja であり、しばしば halle, halleluja と歌う箇所があるので注意を要する。ヘブライ語の語源などに頓着せずにハレルヤを自由に歌おうということか。

【後記】 大急ぎでまとめたため舌足らずの文章となったことをご容赦ください。それにしても上掲の図はルーブルにあるフランス革命を描いたドラクロワの「自由の女神(1830)」の構図に似ているとは思いませんか。(山田)